

# プロ野球監督の楽観主義と チーム成績との関係 CAVE法による説明スタイルと勝率との比較

いとうたけひこ ITO Takehiko  
二川優太 FUTAGAWA Yuta

- 序論
- 研究1：プロ野球監督の楽観主義・悲観主義と同年のチーム成績との関係
- 研究2：プロ野球監督の楽観主義と翌年のチーム成績との関係
- 結論

【要旨】本研究の目的は日本のプロ野球監督の楽観主義とチームの成績との関連を検討することである。12球団の2011年の試合後のスポーツ新聞のインタビュー記事5454件についてCAVE法により楽観主義と悲観主義を評定し、2011年と2012年の勝率と比較した。その結果、監督の楽観的説明スタイルとチームの勝率とは正の相関が見られた。月毎の分析では同年の勝率と楽観主義の時系列的な連動が見られた。回帰分析による翌年の勝率の予測は統計的に有意ではなかったが、防御率と打率の2つの客観的指標の中間の予測力を持つことが示唆された。

## — 序論

### 1. 本研究の背景

#### (1) ポジティブ心理学と楽観主義のスポーツ分野の研究

近年、ポジティブ心理学の台頭による楽観主義 (optimism) に注目した研究が盛んになっている。ポジティブ心理学は、1998年当時、米国心理学会会長であった Seligman によって提唱され、ふつうの人がより仕事のやりがいを感じ、より生きがいを感じ、本当に幸せに生きるための科学とされている。ポジティブ心理学は、従来の心理学とは異なり、人間のこころの働きの中のポジティブな側面に注目し、その研究と実践を目指す心理学であり、その中でも、「楽観性」はポジティブ心理学の中核にあると言われている (島井, 2009)。

ポジティブ心理学が対象とするのは、一般に知られている健康や幸福などが挙げられるほか、スポーツを対象とした研究も挙げられる。たとえば、ポジティブ心理学の生みの親の一人である Seligman (1991/1994) は、スポーツ監督、選手を対象に、楽観主義がスポー

ツとどのような関連があるか研究を行った Rettew & Reivich (1995) の研究を紹介している。Seligman は、この研究において、楽観主義とスポーツの成績は強い関連があるとし、スポーツの場においても楽観主義は重要な要因であると結論づけた。このように、スポーツにおいても、楽観主義がどのように監督、あるいは選手のポジティブなところの働きに影響を与えているのか、その研究が行われている。

しかしながら、日本においては、小橋川 (2003) や井田 (2010) 等の例外を除き、スポーツ分野での楽観主義的説明スタイルを対象とした研究はほとんど行われていないのが現状である。ポジティブ心理学の発展と普及が進む中、ポジティブ心理学によるスポーツ分野の研究、とりわけ、その中核となる楽観主義に注目する研究が求められているのではないだろうか。

## (2) 日本のプロ野球

日本において、プロ野球は、多くのスポーツの中でも高い認知度を誇り、メディアからも多く取り上げられる。球団がある地域では、その地域を挙げて応援しているところも少なくない。プロ野球は国民的スポーツの地位を未だ失っていない。

日本のプロ野球はセントラル・リーグ (以下、セ・リーグ) 6 球団、パシフィック・リーグ (以下、パ・リーグ) 6 球団の計 12 球団により構成されている。1 シーズン (4 月から 10 月中頃) を通じて 144 試合を行い、各リーグにおいて優勝チームを決める。次に、両リーグの優勝チーム同士で日本シリーズを行い、最終的に日本一を決める。また、2007 年よりポストシーズンとしてリーグ戦終了後上位 3 球団によるクライマックスシリーズが行われ、それを戦い勝ち抜いたチームが日本シリーズに出場する権利を手にすることができるように制度改正された。

## (3) Seligman らの先行研究の検討：楽観主義と試合成績の関係

Seligman (1991/1994) と Rettew & Reivich (1995) では、米国のプロ野球を対象に、監督と選手の楽観主義と悲観主義が、試合の成績にどのような関連があるか報告されている。具体的には、監督、選手の試合後のコメントを対象に、楽観度と悲観度を測定し、その楽観度と悲観度が、それぞれ試合の成績とどのような関連が見られるのか明らかにするものであった。

結果は、監督、選手ともに楽観度の高いチームの成績は、悲観度の高いチームの成績に比べ良いというものであった。また、Seligman らは、研究の信頼性を高めるために、同様の研究を翌年のシーズンと 2 度行っている。結果は、先に述べた結論と同様であった。

また、それと同時に、Seligman は、楽観度が高いチームは、翌年の成績も良くなるという予測を立て、それを実証するために、1986 年シーズンと翌 1987 年シーズンの、前年の楽観度と翌年のチーム成績との関連を明らかにする研究も行った。結果は、楽観度が高かったチームは、翌年のチームの成績も良くなり、悲観度が高かったチームは成績が悪くな

る傾向があるという結果であった。また、プレッシャーのかかる場面においては、楽観度の高いチームほどよく打ち、悲観度の高いチームほど、凡打に終わる傾向があることも明らかにした。

つまり、Seligman の研究の結果は、以下の2点にまとめることができる。①楽観度が高い監督・選手が所属しているチームは、悲観度が高いチームよりも成績がよく、②楽観度が高いチームは、翌年のチーム成績もよく、チーム成績は、楽観度によって予測することが可能である。

Seligman の研究は、米国のプロ野球においては、楽観主義と成績との高い関連が実証された結果となったが、この研究を日本のプロ野球を対象に行った者はいない。そのため、Seligman の研究結果が、日本のプロ野球界においても当てはまるか否かは、いまのところ明らかにされてはいない。今後の研究で求められることは、日本のプロ野球を対象とした、楽観主義と成績との関連を明らかにすることであり、Seligman らの研究の再検討であろう。

## 2. 本論文全体の目的

本研究の主な目的は、プロ野球監督の楽観主義とチームの成績の関連について実証的に明らかにすることである。具体的な目的は以下の2つである。

第1の目的は、監督の試合後のコメントを分析し、監督の説明スタイルと勝率との関係を明らかにすることである。Seligman が提唱した、楽観主義者は成功するという研究結果は、プロ野球監督にも関連があり、同年の勝負成績と楽観主義との間に関連があるかどうかを実証的に明らかにする。

第2の目的は、監督の楽観主義が、翌年の成績と関係があるか、すなわち監督の楽観主義を用いて翌年の成績予想を行えるかを明らかにすることである。2011年シーズンの各監督のデータをもとに、翌2012年シーズンの成績と比較することによって、監督の楽観主義から翌年の成績の予測が可能かを検討する。

第1の目的に関しては、研究1で扱う。ここでは、監督の試合後コメントを対象にCAVE法を用いた分析を行い、監督の楽観主義と成績との関係を考察する。第2の目的に関しては、研究2で扱う。ここでは、研究1で得られた、監督の楽観主義と翌年の成績との関係を考察する。

## 3. 用語の定義：楽観主義・悲観主義とは

Seligman (1991/1994) によれば、楽観主義とは、悪い事態が起きても、それは自分の責任ではなく、一時的なもので、その原因も特定の（この場合のみに限られる）と考える説明スタイルである。そして挫折は自分のせいではなくその時の状況や不運や他の人がもたらしたもので、外的なものとする。良い出来事に関しては、永続的に、他のことに関しても同じようになることと普遍的に考え、それは自分自身が作り出した、内的なものだと思ふことである。

次に、悲観主義とは、楽観主義とは逆に、悪い事態の原因は自分自身にあると内的に考える説明スタイルである。他のことに関しても同じように悪くなると普遍的に考えてしまう。いつも自分は何をやってもうまくいかないだろうし、それは自分が悪いからだと思いつ込む傾向である。逆に、良い出来事に関しては、それは一時的な出来事で、他の出来事とは関係なく特定の考え、その原因を自分自身の力ではなく外的なものだと思う説明スタイルである。

新聞記事や作文なども含め、語り (narrative) における楽観主義・悲観主義は CAVE 法 (Shulman, Castellon, & Seligman, 1989: Content analysis of verbatim explanation 説明スタイルの逐語的内容分析) により操作的に定義され量的に測定される (渡邊・いとう・井上, 2010) ことが知られている。本研究でも、勝ち負けの説明スタイルにより、楽観主義・悲観主義を測定する尺度として Seligman (1991/1994) の、CAVE 法 (説明スタイルの逐語的内容分析) を用いた。説明スタイルとは、自分に起こった出来事を習慣的に帰属するスタイルのことで、内的・外的、永続的・一時的、普遍的・特定の 3つの側面から構成される。CAVE 法は、これら 3つの側面を評価、点数付けし、楽観主義・悲観主義を測定する尺度である (渡邊・いとう・井上, 2010)。本研究では、勝ち試合と負け試合とを分けて、監督の試合後コメントの説明スタイルを CAVE 法で測定した。

#### 4. プロ野球監督の試合後のコメントの説明スタイル

次に、プロ野球監督の試合後のコメントの説明スタイルの具体例を以下に示す。

##### (1) 永続性

勝ち試合において、楽観的なのは、勝ったことを永続的に考えることで、悲観的なのは、勝ったことを一時的に考えることである。

負け試合において、楽観的なのは、負けたことを一時的に考えることで、悲観的なのは、負けたことを永続的に考えることである。

以下は、プロ野球監督の試合後コメントの具体例である。

[勝ち試合の説明スタイル]

永続的 (楽観的)

「今シーズンはずっと」「いつも調子が良い」「これからもこの調子で行ける」「いつも通り」「ずっと活躍している」

一時的 (悲観的)

「今日は、たまたま」「今日だけ良かった」「ラッキーだった」

[負け試合の説明スタイル]

一時的 (楽観的)

「今日は疲れていた」「今週は調子が悪い」「今日は上手くいかなかった」

永続的 (悲観的)

「これからずるずる負けそう」「ここ最近ずっと」「今シーズンはずっと調子が悪い」

## (2) 普遍性

勝ち試合において、楽観的なのは、勝った要因を全体的なものにすることで、悲観的なのは、勝った要因を特定のものにすることである。

負け試合において、楽観的なのは、負けた要因を特定のものにすることで、悲観的なのは、負けた要因を全体的なものにすることである。

以下は、プロ野球監督の試合後コメントの具体例である。

[勝ち試合の説明スタイル]

普遍的 (楽観的)

「チーム全員が良かった」「チームがまとまっていた」「みんなよく働いた」

特定の (悲観的)

「〇〇選手が良かった」「投手が良かった」「あの打席が良かった」

[負け試合の説明スタイル]

特定の (楽観的)

「〇〇選手が悪かった」「打者が悪かった」「相手の〇〇選手が良かった」

普遍的 (悲観的)

「チームの調子が悪かった」「誰も打てない」「みんな打たれる」

打撃陣、投手陣など複数の選手に帰属させるのは、特定のと普遍的の中間とした。

## (3) 個人度

勝ち試合において、楽観的なのは、勝ったことについて内的 (自分のチーム) 説明をすることであり、悲観的なのは、勝ったことについて外的 (自分のチーム以外) 説明をすることである。

負け試合において、楽観的なのは、負けたことについて外的 (自分のチーム以外) 説明をすることであり、悲観的なのは、負けたことについて内的 (自分のチーム) 説明をすることである。

以下は、プロ野球監督の試合後コメントの具体例である。

[勝ち試合の説明スタイル]

内的 (楽観的)

「うちのチームの調子が良い」「わがチームは強い」「采配が成功した」

外的 (悲観的)

「相手チームの調子が悪かった」「審判の判定に助けられた」「天候が味方してくれた」

[負け試合の説明スタイル]

外的 (楽観的)

「相手の調子よかった」「天候のせいだ」「アウェーだったから不利だった」  
内的（悲観的）

「〇〇選手の調子が悪かった」「ミスが多く出てしまった」

説明スタイルは以上のようになる。これらの説明スタイルを CAVE 法を用い評定を行う。

## —— 研究 1：プロ野球監督の楽観主義・悲観主義と同年のチーム成績との関係

### 【目的】

研究 1 の目的は、新聞記事に掲載された、監督の試合後のコメントを対象に、試合結果の原因帰属を分析し、各監督の楽観主義・悲観主義を測定することによって、勝率との関係を実証的に明らかにすることである。

### 【方法】

研究対象は、「スポーツニッポン」「日刊スポーツ」「スポーツ報知」「産経スポーツ」の 4 つのスポーツ新聞に掲載された、12 球団の監督の試合後のコメント記事である。2011 年 4 月 13 日より 2011 年 10 月 26 日までの記事を対象とした。

まず、対象となる資料の整理を行った。方法は、対象となる記事を切抜き、エクセルファイルに入力を行った。エクセルへの入力は、「ID」「新聞」「年」「月」「日」「ページ」「順番号」「監督名」「内的・外的」「普遍的・特定の」「永続的・一時的」「勝敗」「コメント」の 13 項目であった。

CAVE 法は、説明スタイルの発言の評価を、内的・外的、永続的・一時的、普遍的・特定の 3 つの側面について 7 件法で点数づけを行う。各側面について 1 点から 7 点で評価する。3 つの側面の点数を合計した得点が、最終的な評価の点数となる。

勝ち試合の場合、点数が高ければ高いほど、楽観的という結果になる。つまり、内的・永続的・普遍的な説明スタイルの監督の点数は高く、楽観的となり、外的・一時的・特定の説明スタイルの監督の点数は低く、悲観的となるのである。点数が最も高い 21 点に近ければ近いほど楽観的であり、一方、最も低い 3 点に近ければ近いほど悲観的という結果になる。

負け試合の場合は、点数が高ければ高いほど、悲観的という結果になる。つまり、内的・永続的・普遍的な説明スタイルの監督の点数は高く、悲観的となり、外的・一時的・特定の説明スタイルの監督の点数は低く、楽観的となるのである。点数が最も高い 21 点に近ければ近いほど悲観的であり、一方、最も低い 3 点に近ければ近いほど楽観的という結果になる。

CAVE 法による分析は、筆者 2 名と、研究 1 の共同研究者 1 名、合計 3 名で行った。評定の信頼性を高めるため、例題を設定し、評定の一致率を高め、測定の習熟をはかった。

## 【結果】

対象となったコメント数は、全部で5454記事であった。うち引き分け373記事は分析の対象外とし、勝ち監督2379コメントと負け監督2702コメントを分析の対象とした。

## (1) 勝ち試合の楽観主義について

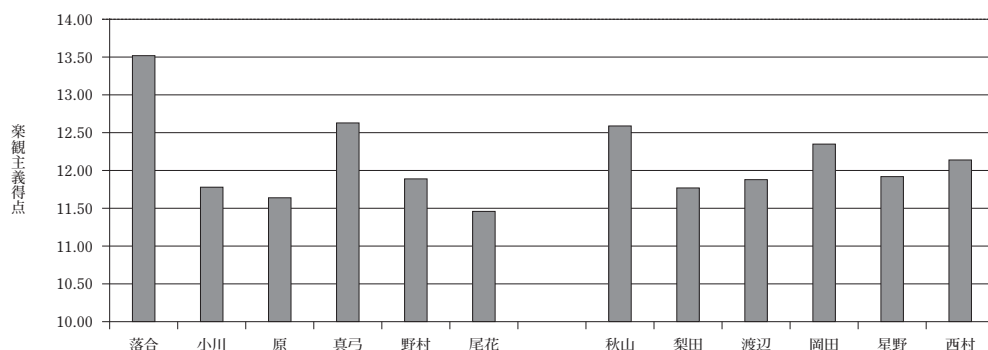
勝ち試合のコメントの楽観度を分析・比較した。記述統計を表1-1に示す。勝負順位と楽観度の関係をグラフで表すと、図1-1となる。セ・パ両リーグの優勝チームの落合、秋山両監督の楽観度は各リーグの中でも1番に高い楽観度である。勝ち試合のコメントを他の監督と比較してみても、落合、秋山両監督の楽観度は高かった。しかしながら、後述するが、その他の監督も連勝や順位が上がったりすると、コメントの楽観度が高くなる傾向が多く見られた。

この結果、楽観度の高い監督のチームは、勝率が高く、良い成績を残しているという関係が分かった。それに伴い、監督の楽観度は、成績の良し悪しで、高くもなり低くもなる傾向が見られたことから、必然的に、順位が高い監督の楽観度は高くなり、順位の低い監督の楽観度は低いという結果になったと思われる。

表1-1 勝ち試合の楽観主義

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
落合	182	13.52	3.52	0.26	13.00	14.03	5	21
小川	225	11.78	2.94	0.20	11.40	12.17	4	21
原	364	11.64	2.65	0.14	11.37	11.91	6	19
真弓	162	12.63	3.31	0.26	12.12	13.14	7	21
野村	129	11.89	2.98	0.26	11.37	12.41	3	21
尾花	118	11.46	2.79	0.26	10.95	11.97	7	19
秋山	195	12.59	3.49	0.25	12.10	13.09	3	21
梨田	186	11.77	2.77	0.20	11.37	12.17	6	19
渡辺	206	11.88	3.50	0.24	11.40	12.36	3	21
岡田	218	12.35	3.38	0.23	11.90	12.80	3	21
星野	261	11.92	3.00	0.19	11.55	12.28	3	21
西村	133	12.14	3.15	0.27	11.60	12.68	7	21
合計	2379	12.10	3.15	0.06	11.98	12.23	3	21

図1-1 12監督の勝ち試合のコメントの楽観主義得点 (2011年)



## (2) 負け試合の悲観主義について

負け試合のコメントの悲観度を分析・比較した。表 1-2 は 12 監督の記述統計をまとめたものである。

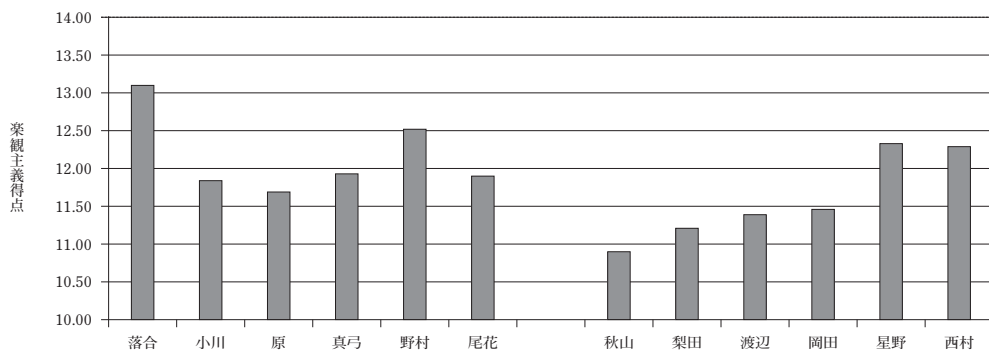
次に、実際に順位と悲観主義との関係性をグラフで表すと、図 1-2 のようになる。セ・パ両リーグの最下位チームの尾花、西村両監督の悲観度はリーグの中でも高い。そして、そのほかの勝率が低い監督の悲観度も高いことが分かる。負け試合のコメントも、連敗が続いたり、順位が下がった日のコメントは悲観度が高かった。しかし、セ・リーグ優勝チームの落合監督は、ほかの監督とは違う傾向がある。勝率が高いにもかかわらず、負け試合でのコメントの悲観度が高いのである。楽観度も他の監督より高かったのだが、悲観度もほかの監督より高いというデータが出た。

この結果、落合監督のような一部のデータは特別なケースとして、悲観度の高い監督のチームは、勝率が低く、悪い成績を残しているという関係が明らかになった。また、勝ち試合の楽観主義の結果と同様に、監督の悲観度は、試合の良し悪しによって、高くもなり低くもなる傾向が見られることから、必然的に、順位が低い監督の悲観度は高くなり、順位の高い監督の悲観度は低いという結果となったと思われる。

表 1-2 負け試合の悲観主義

	度 数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下 限	上 限		
落合	183	13.10	2.79	0.21	12.69	13.50	6	19
小川	226	11.84	3.24	0.22	11.41	12.26	3	19
原	281	11.69	3.00	0.18	11.34	12.05	3	19
真弓	208	11.93	3.28	0.23	11.48	12.38	3	19
野村	200	12.52	2.79	0.20	12.13	12.90	7	19
尾花	270	11.90	3.29	0.20	11.51	12.30	3	21
秋山	102	10.90	3.27	0.32	10.26	11.54	3	17
梨田	215	11.21	3.57	0.24	10.73	11.69	3	21
渡辺	252	11.39	3.23	0.20	10.99	11.79	3	19
岡田	233	11.46	3.58	0.23	11.00	11.92	3	21
星野	271	12.33	3.45	0.21	11.92	12.74	3	21
西村	261	12.29	2.74	0.17	11.96	12.63	4	21
合計	2702	11.91	3.24	0.06	11.78	12.03	3	21

図 1-2 12 監督の負け試合のコメントの悲観主義得点 (2011年)





### (3) 勝ち試合の楽観主義、負け試合の悲観主義と勝率との関係

勝ち試合の楽観度の高さと勝率は関係が強く、各リーグの優勝チームの落合監督と秋山監督の楽観度は高かった。一方、負け試合の悲観度の高さと勝率も関係が強いという結果が得られた。しかし、落合監督のような勝率が高くても負け試合の悲観度が非常に高い、他の監督には見られない特別なケースもあった。

表1-3は、2011年シーズンの順位表と、「勝率」「打率」「チーム本塁打」「得点」「失点」「チーム防御率」「勝ち試合の楽観主義」「負け試合の悲観主義」を表したものである。この表1-3をもとに、勝率と各項目の相関係数を求めると、勝率に対して、勝利試合の楽観主義  $r = .469$ 、敗北試合の悲観主義  $r = -.377$  と弱い相関を示していた。勝率と客観的な指標との相関は、打率  $r = .452$ 、本塁打  $r = .526$ 、得点  $r = .573$ 、失点  $r = -.847$ 、防御率  $r = -.818$  であった。このうち5%水準で有意であったのは、失点と防御率であった。

### (4) 月別成績と月別楽観主義との関係

次に、月別成績と月別の楽観主義との関係を検討する。各監督の、月別の勝率と同じく月別の楽観主義を比較することで、勝率の変動と楽観主義の変動の関係を明らかにする。各監督が率いるチームの月別の勝率と、各監督の月別のCP-CN (楽観度から悲観度を引いたもの) のグラフを作成した。本論文では、紙数の都合によりセ・リーグの6監督の結果を表示し、パ・リーグの監督の結果は省略する。

落合監督 (図1-3、図1-4) の4月の勝率は、0.46であり、CP-CNは-4.07であった。5月に入

図1-3 落合監督の月別勝率

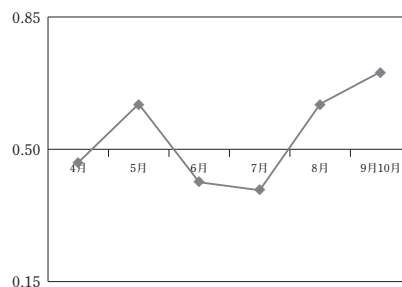


図1-4 落合監督の月別CP-CN (総合楽観主義)

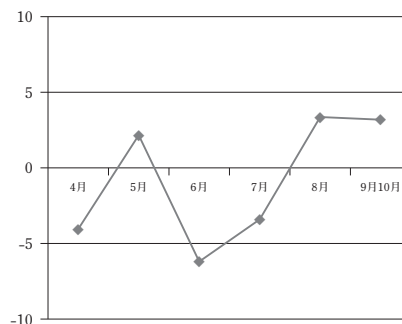


表1-3 プロ野球順位表 (スポニチ, 2011) と楽観主義・悲観主義との関係

リーグ	順位	監督	チーム	勝率	打率	本塁打	得点	失点	防御率	勝楽観主義	負悲観主義
セ	1	落合	中日	0.560	0.228	82	419	410	2.46	13.52	13.10
セ	2	小川	ヤクルト	0.543	0.244	85	484	504	3.36	11.78	11.83
セ	3	原	巨人	0.534	0.243	108	471	417	2.61	11.64	11.69
セ	4	真弓	阪神	0.493	0.255	80	482	443	2.83	12.63	11.93
セ	5	野村	広島	0.441	0.245	52	439	496	3.22	11.89	12.52
セ	6	尾花	横浜	0.353	0.239	78	423	587	3.87	11.46	11.90
パ	1	秋山	ソフトバンク	0.657	0.267	90	550	351	2.32	12.59	10.90
パ	2	梨田	日本ハム	0.526	0.251	86	482	418	2.68	11.77	11.21
パ	3	渡辺	西武	0.5037	0.253	103	571	522	3.15	11.88	11.39
パ	4	岡田	オリックス	0.5036	0.248	76	478	518	3.33	12.35	11.46
パ	5	星野	楽天	0.482	0.245	53	432	464	2.85	11.92	12.33
パ	6	西村	ロッテ	0.406	0.241	46	432	533	3.4	12.14	12.29

ると勝率は0.61と上がり、CP-CNも2.13と上がった。6月の勝率は0.42と下がり、CP-CNも-6.81と下がった。後半戦に入った7月の勝率は0.39と下がったが、CP-CNは、-3.44と上がった。8月の勝率は0.61と上がり、CP-CNも3.35と上がった。最終月の9・10月の勝率は0.70と上がったが、CP-CNは、3.18とわずかに下がった。

落合監督は、シーズン中盤と最終月には、勝率とCP-CNに関連が見られなかったものの、その他の月は関連が見られた。

小川監督(図1-5、図1-6)の4月の勝率は0.64であり、CP-CNは2.46であった。5月の勝率は0.5と下がり、CP-CNも-2.98と下がった。6月に入ると勝率は0.62とさらに上がり、CP-CNも2.32と上がった。後半戦の7月の勝率は0.66と上がり、CP-CNも3.17と上がった。8月に入ると勝率は0.31と下がり、CP-CNも-4.47と同様に下がった。最終月の9・10月は、勝率が0.56と上がり、CP-CNも0.59と上がった。

小川監督は、シーズンを通して、勝率とCP-CNが連動して変化しており、チームの成績によってCP-CNが変化している。

原監督(図1-7、図1-8)の4月の勝率は0.41であり、CP-CNは-2.61であった。5月の勝率は0.52と上がり、CP-CNも-1.01と上がった。6月に入ると勝率は0.35と下がったが、CP-CNは-0.95となった。後半戦に入り、7月の勝率は0.50と上がり、CP-CNも0.13と上がった。8月の勝率は0.68とさらに上がり、CP-CNも3.99と同様に上がった。最終月の9・10月の勝率は0.58と下がり、CP-CNも3.10と下がった。

原監督は、シーズン前半には、勝率とCP-CNとの関連は少なかったものの、中盤から後

図1-5 小川監督の月別勝率

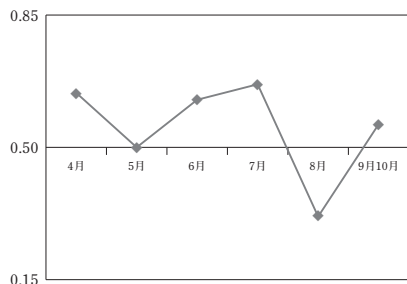


図1-6 小川監督の月別CP-CN (総合楽観主義)

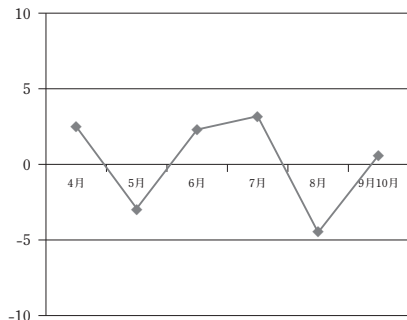


図1-7 原監督の月別勝率

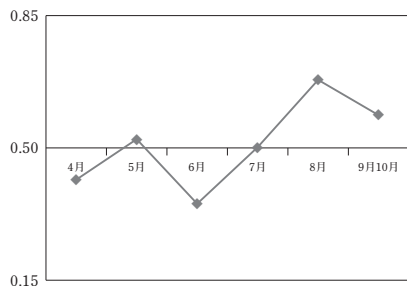
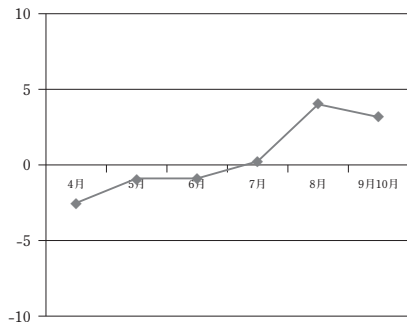


図1-8 原監督の月別CP-CN (総合楽観主義)



半にかけては、勝率と CP-CN の関連が見られた。

真弓監督 (図 1-9、図 1-10) の 4 月の勝率は 0.5 であり、CP-CN は -4.12 であった。5 月に入ると勝率は 0.31 と下がり、CP-CN も -6.37 と下がった。6 月には勝率が 0.55 と上がり、CP-CN は -0.35 となった。後半戦の 7 月に入ると、勝率は 0.61 とさらに上がり、CP-CN も 1.67 と上がった。8 月の勝率は 0.54 と下がったものの、CP-CN は、2.61 と上がった。最終月の 9・10 月の勝率は 0.46 と下がり、CP-CN も -2.42 と下がった。

真弓監督は、8 月こそは勝率と CP-CN の関連が見られなかったものの、その他の月に関しては、勝率と CP-CN に関連が見られた。

野村監督 (図 1-11、図 1-12) の 4 月の勝率は 0.64 であり、CP-CN は 0.79 であった。5 月の勝率は 0.36 と下がり、CP-CN も -4.39 となった。6 月の勝率は 0.35 とわずかに下がったが、CP-CN は -8.62 と大幅に下がった。後半戦に入る 7 月の勝率は 0.54 と上がり、CP-CN も 1.40 となった。8 月の勝率は 0.56 と上がったが、CP-CN は 0.07 となった。最終月の 9・10 月の勝率は 0.30 と下がり、CP-CN も -4.06 と下がった。

野村監督は、8 月こそは勝率と CP-CN の関連が見られなかったものの、その他の月に関しては、勝率と CP-CN に関連が見られた。

尾花監督 (図 1-13、図 1-14) の 4 月の勝率は 0.33 であり、CP-CN は -2.36 であった。5 月に入ると勝率は 0.40 と上がったが、CP-CN は -2.91 となった。6 月に入ると勝率は 0.41 とわずかに上がったが、CP-CN は -3.30 と下がった。後半戦に入る 7 月の勝率は 0.30 と下がり、CP-CN も同様に -4.67 と下がった。8 月の勝率は 0.23 とさらに下がり、CP-CN も -7.29 となった。

図 1-9 真弓監督の月別勝率

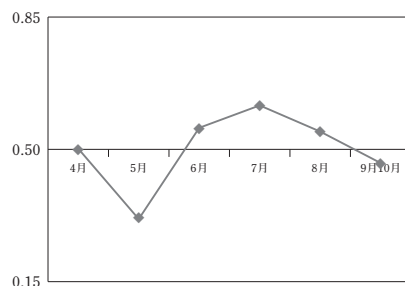


図 1-10 真弓監督の月別CP-CN(総合楽観主義)

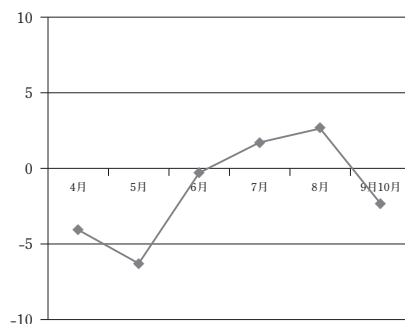


図 1-11 野村監督の月別勝率

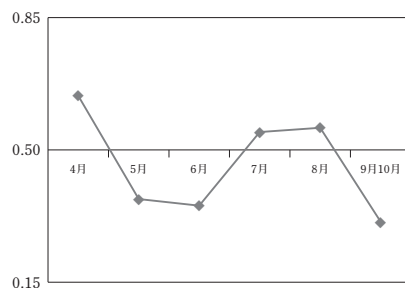
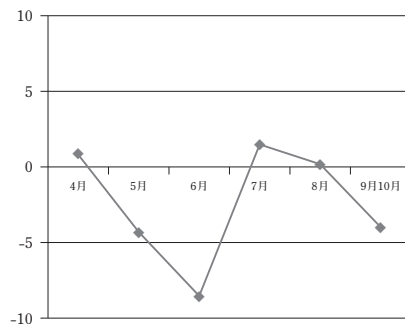


図 1-12 野村監督の月別CP-CN(総合楽観主義)



最終月の9・10月の勝率は0.39と上がり、CP-CNも-4.19となった。

尾花監督は、シーズン前半の勝率とCP-CNにはあまり関連が見られなかったものの、後半にかけては、関連が見られた。

### 【考察】

#### 楽観主義と同年のチームの成績とのポジティブな関係

監督の楽観主義・悲観主義は、チームの成績と関係が強かった。つまり、チームの勝率が高い監督の楽観主義は高く、勝率が低い監督の悲観主義は高かった。中には、落合監督のように、勝率の良いチームにもかかわらず、悲観主義が高いという結果があったが、基本的には、楽観主義・悲観主義ともに、チームの成績と強い関係があったことが本研究の結果から明らかになった。しかしその関係は傾向を表すものであり、必ずそうなるというものではなかった。たとえば、勝率が最も高い落合監督の場合のように、勝っても負けても内的に自分のチームのことを語る傾向がある監督は、勝ち試合は楽観主義が強く、負け試合は悲観主義が強いため、総合すると楽観主義が強いとは言えなくなっている。本研究の結果から、Seligman (1991/1994) が主張する楽観主義と成績とのポジティブな関係には、大まかにはその傾向にあるが、例外もあるということが明らかになった。

また、月別の勝率と楽観主義・悲観主義との関連を見てみると、勝率の変動につれて、楽観主義・悲観主義も変動する傾向が見られた。これは今回紹介したセ・リーグの監督だけでなく、結果を省略したパ・リーグの監督でも同様の傾向が見られた。つまり、楽観主義者がチームの成績を良くし、悲観主義者がチームの成績を悪くしたという説明が可能な一方で、その逆に、成績が良いから監督は楽観主義者になり、成績が悪いから監督は悲観主義者になったという解釈も可能である。つまり楽観主義とパフォーマンスとは一方向の因果関係としてとらえるよりも、循環的な関係としてとらえることができる。このような循環的な相互関係については、Retzew & Reivich (1995) も、説明スタイルとパフォーマンスとが双方向的・循環的な関係を持つモデルを提示している。本研究では月別で分析したことによって、この双方向的関係を実証的に明らかにすることができた。したがって、楽観主義と悲観主義という説明スタイルが勝率というパフォーマンスに影響を与えるかどうかを明らかにするためには、たとえば翌年度の勝率との関連を検討しなければならない。

図1-13 尾花監督の月別勝率

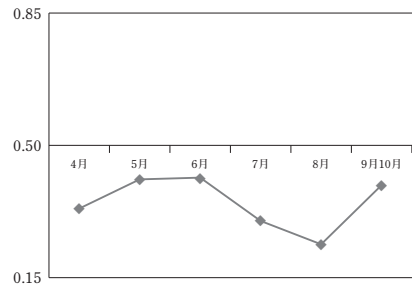
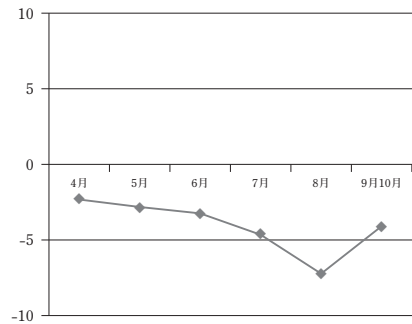


図1-14 尾花監督の月別CP-CN(総合楽観主義)



## ——研究2：プロ野球監督の楽観主義と翌年のチーム成績との関係

### 【目的】

研究2の目的は、監督の試合後の勝敗の帰属の説明スタイル (Rettew & Reivich, 1995) を CAVE 法 (渡邊ら, 2010) により評定し、その監督の楽観主義・悲観主義の説明スタイルと次年度のチーム勝率との関係を明らかにすることにより、監督の試合の説明スタイルが将来の成績を予測できるかどうかを明らかにすることである。

### 【方法】

研究1と同様に、「スポーツニッポン」「日刊スポーツ」「スポーツ報知」「産経スポーツ」の4つのスポーツ新聞に掲載された、12球団の監督の試合後のコメント記事(2011年4月13日より2011年10月26日までの記事)を対象とした。また、翌年度の予測の対象となるのは、2012年シーズンの12チームの成績である。

研究1で用いた2011年の監督の楽観主義・悲観主義の評定値と、翌年の2012年度シーズンの8チームの勝率との関係を(中日・落合、阪神・真弓、横浜・尾花、日本ハム・梨田の4名は退任した)明らかにする。

2011年シーズンにおける、CAVE法を用いて測定した楽観度・悲観度のデータをもとに、翌2012年シーズンの成績と比較することによって、監督の楽観主義によって、翌年の成績の予測が可能かを明らかにする。

### 【結果】

#### (1) 2011年と2012年の監督の入れ替え、新監督の成績

2012年のプロ野球は、2011年の12人の監督のうち、4名が新たに就任した。セ・リーグでは、中日が落合監督に代わり、高木監督が就任。阪神は真弓監督に代わり、和田監督が就任し、横浜では尾花監督に代わり、中畑監督が就任した。パ・リーグでは、日本ハムが梨田監督に代わり、栗山監督が新たに就任した。12人中4人が交代したことは本研究にとって痛手であった。

新監督の順位をセ・リーグから整理する。高木監督の中日が、第2位。和田監督の阪神

表2-1 順位変動表(点線は監督交代)

セ・リーグ				パ・リーグ							
2011年		→	2012年		2011年		→	2012年			
1位	中日	(落合)	→	巨人	(原)	1位	ソフトバンク	(秋山)	→	日本ハム	(栗山)
2位	巨人	(原)	→	中日	(高木)	2位	日本ハム	(梨田)	→	西武	(渡辺)
3位	ヤクルト	(小川)	→	ヤクルト	(小川)	3位	西武	(渡辺)	→	ソフトバンク	(秋山)
4位	阪神	(真弓)	→	広島	(野村)	4位	オリックス	(岡田)	→	楽天	(星野)
5位	広島	(野村)	→	阪神	(和田)	5位	楽天	(星野)	→	ロッテ	(西村)
6位	横浜	(尾花)	→	横浜	(中畑)	6位	ロッテ	(西村)	→	オリックス	(岡田)

が、第5位。中畑監督の横浜が、第6位であった。続いてパ・リーグの栗山監督の日本ハムが、第1位であった。

### (2) 2011年と2012年のプロ野球全体の順位の変動

2011年と2012年のプロ野球の順位変動を整理すると表2-1のように要約できる。なおセ・リーグの6位の横浜は2012年にDeNAと球団名が変わったが、比較のために旧称を用いた。

### (3) 2011年度の監督の勝利試合の楽観主義と2012年度のチーム勝率との関係

まず、図2-1に、2011年度の勝利試合の楽観主義と、2011年度の各チームの勝率(表2-2)との関係を示した。図2-1では、その年の楽観主義とチーム勝率は、正の相関があることが分かる。

次に、2011年度、監督の勝利試合の楽観主義と2012年度のチーム勝率との関係を図2-2に示した。2011年度の勝利試合において楽観主義の高かった監督は、ソフトバンク・秋山監督とオリックス・岡田監督であったが、2012年度のチーム勝率は高くなかった。一方、セ・リーグ優勝チーム巨人・原監督は、2011年度の勝利試合の楽観主義は高くないが、2012年度のチーム勝率は高いという結果になった。2011年度は正の相関 $r = .392$  ( $p = .208$ )であったが、2012年度は $r = -.562$  ( $p = .147$ )と負の相関となった。

### (4) 2011年度の敗北試合の悲観主義と2012年度のチーム勝率との関係

まず、図2-3に2011年度の敗北試合の悲観主義とその年のチーム成績との関係を示した。次に、2011年度の敗北試合の悲観主義と2012年度のチーム勝率との関係を図2-4に示した。2011年度の敗北試合の悲観主義が低い監督は、ソフトバンク・秋山監督と西武・渡辺監督であったが、勝率は高くはなかった。2011年度の敗北試合の悲観主義がやや低かった巨人・原監督のみ、2012年度チーム勝率は高かった。相関係数は、2011年度は $r = -.312$  ( $p = .323$ )であったが、2012年度は $r = -.178$  ( $p = .673$ )と低くなった。

### (5) 楽観主義とチーム成績との関係

2011年の楽観主義の合成値CPCNと2011年の勝率とは有意の相関 $r = .619$  ( $p = .032$ )があったが、2012年度は $r = -.105$  ( $p = .805$ )と無相関になった。

### (6) 勝率の予測

監督の代わらなかつた8チームについて、多重共線性を考慮して、打率・防御率・勝ち楽観主義・負け悲観主義の4つを独立変数として、翌年度の勝率を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、翌年度の勝率はこれらの4つの変数で $R^2 = .802$ 、調整済み $R^2 = .689$ なので、翌年度の勝率はこれらの4つの変数で69-80%説明できると言えよう。勝率

図2-1 勝利試合の楽観主義 (2011) と同年の勝率 (2011) との関係

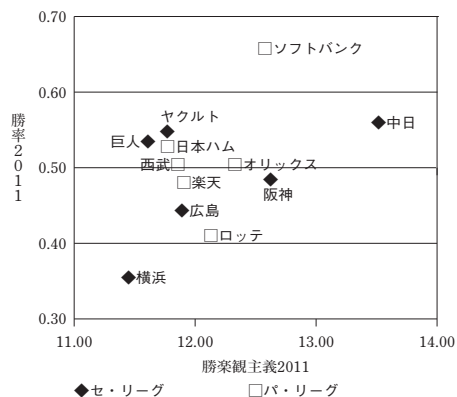


図2-2 勝利試合楽観主義 (2011) と翌年の勝率 (2012) との関係

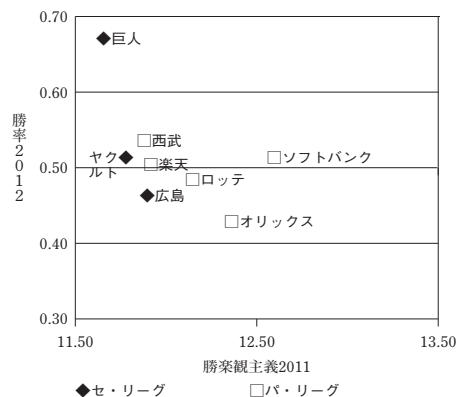


図2-3 敗北試合の悲観主義 (2011) と同年の勝率 (2011) との関係

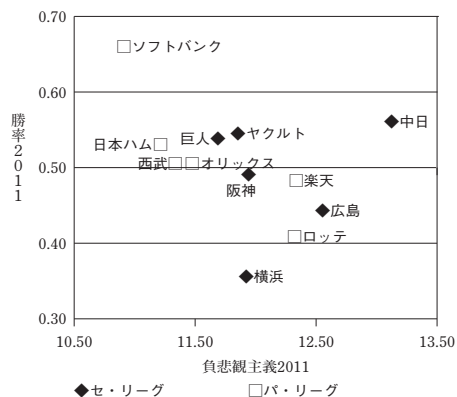


図2-4 敗北試合の悲観主義 (2011) と翌年の勝率 (2012) との関係

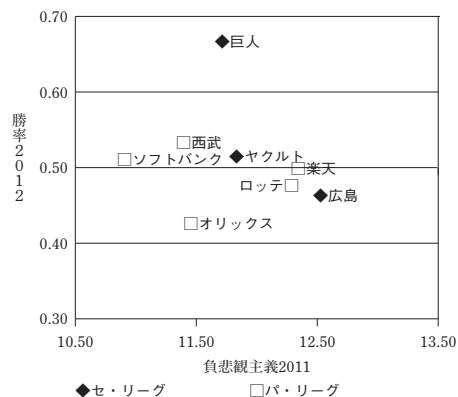


表2-2 プロ野球2012成績順位表 (スポニチ、2012)

セ・リーグ (全日程終了)

順位	監督	チーム	試合数	勝数	敗数	引分	勝率	打率	本塁打	得点	失点	防御率
1	原	巨人	144	86	43	15	0.667	0.256	94	534	354	2.16
2	(高木)	中日	144	75	53	16	0.586	0.245	70	423	405	2.58
3	小川	ヤクルト	144	68	65	11	0.511	0.260	90	499	514	3.35
4	野村	広島	144	61	71	12	0.462	0.233	76	427	454	2.72
5	(和田)	阪神	144	55	75	14	0.423	0.236	58	411	438	2.65
6	(中畑)	DeNA	144	46	85	13	0.351	0.233	66	422	571	3.76

パ・リーグ (全日程終了)

順位	監督	チーム	試合数	勝数	敗数	引分	勝率	打率	本塁打	得点	失点	防御率
1	(柴山)	日本ハム	144	74	59	11	0.556	0.256	90	510	450	2.89
2	渡辺	西武	144	72	63	9	0.533	0.251	78	516	518	3.24
3	秋山	ソフトバンク	144	67	65	12	0.508	0.252	70	452	429	2.56
4	星野	楽天	144	67	67	10	0.500	0.252	52	491	467	2.99
5	西村	ロッテ	144	62	67	15	0.481	0.257	64	499	502	3.13
6	岡田	オリックス	144	57	77	10	0.425	0.241	73	443	525	3.34

予測の大きさは、1位・防御率 ( $\beta = -638$ ,  $p = .023$ )、2位・負け試合の悲観主義 ( $\beta = -505$ ,  $p = .166$ )、3位・勝ち試合の楽観主義 ( $\beta = .295$ ,  $p = .246$ )、4位・打率 ( $\beta = -.108$ ,  $p = .739$ ) という結果であった。次年度のチーム成績を予測するのは防御率であり、前年度の監督の楽観主義・悲観主義で予測できる傾向は Rettew & Reivich (1995) と共通し、打率よりも予測力が高かった。しかし、有意差には至らなかった。

### 【考察】

監督の楽観主義・悲観主義と、同年のチームの勝率は、関係があったと結論づけることができる。しかし、研究2においては、次年度のチーム成績を前年度の監督の楽観主義・悲観主義で予測できるという Seligman (1991/1994) や Rettew & Reivich (1995) の研究結果を確証するには至らなかった。

また、勝率予測の大きさは、1位・防御率、2位・負け試合の悲観主義、3位・勝ち試合の楽観主義、4位・打率という結果であり、勝利予測は、楽観主義・悲観主義よりも、防御率、いわゆる投手力を考慮した予測の信頼性が高い。楽観主義の2項目の標準回帰係数は、決して小さくはなかったが、サンプル数が8人と小さく、統計的有意差は得られなかった。とはいえ、打率よりも予測の度合いが大きいことから、楽観主義・悲観主義の予測可能性について簡単に結論を出すことはできない。一方で楽観主義・悲観主義の帰属態度は、その年のチーム成績、状況を反映していると言えるものの、そのチームの未来の成績を予測できるかどうかについては今回は確言できなかった。

各監督の楽観主義・悲観主義は、打者のデータである打率よりも予測力が高かったが、投手のデータである防御率ほどには、チームの成績の持続性、永続性を示すことはできなかった。その理由として、監督12人中4人が交代することにより、データの精度が著しく低下したことが挙げられる。Seligman (1991/1994) や Rettew & Reivich (1995) のデータは監督だけではなく選手のコメントの分析を行っており、このような問題から逃れられている。とはいえ、楽観主義・悲観主義が、防御率に次いで予測力を持ち、打率の予測力を上回るという結論を得られたことには意義があると考えられる。

## —— 結論

### 1. 本研究の結果の要約と考察

研究1において明らかになったことは、第1に、チームの成績と、監督の楽観主義・悲観主義は大きく関連が見られるということである。そして第2に、チームの成績によって、監督の楽観主義・悲観主義は連動して変化するものであって、コンスタントに楽観主義であったり、悲観主義である監督はいないということである。シーズン終了時の楽観度と悲観度は、ほとんどの監督において、関連が見ることができた。成績の良い監督の楽観度は高く、成績の悪い監督の悲観度は高かった。



連勝が続いたり、連敗が続いたりすると、その楽観主義・悲観主義にも変化が見られることも明らかになった。そのため、シーズン全体での、楽観度及び悲観度の平均値と、チームの順位では、関連は見られたものの、監督によりばらつきが見られた。

二川 (2014) のテキストマイニングを利用した各監督のコメント内容の質的な分析において明らかになったことは、監督のコメントは、チームの順位によって特徴が見られたということである。チームのことをバランスよく発言している監督のチームは成績が良く、投手や打者といった偏った発言が多く見られたのは成績の悪いチームの監督であった。また、最も特徴的だったのは、落合監督であった。勝ち試合、負け試合に関係なく、落合監督は、選手個人の名前を発言することは極端に少なく、チーム全体に対する発言が圧倒的に多かった。試合の結果の要因を普遍的に見ていることの反映であろう。また、自分のチームについての発言しかなく、試合結果の要因を、常に自分のチームに求めている、すなわち内的帰属の説明スタイルであることが明らかにされた。

そこで二川 (2014) は落合監督の著書2冊と解説書1冊をテキストマイニングおよび内容分析を行った。本人の発言に関しては、「情報管理」という監督の仕事を非常に重視した発言を行っていること、シーズンを戦ううえでの計画には悲観的であること、そして実践の場面になると楽観的になることが、落合監督の特徴として明らかになった。落合監督は勝利試合の楽観主義が一番高く、敗北試合の悲観主義も一番高かった。これは常に自分のチームのことを言及することに起因すると思われる。いずれにせよ中日の監督の交代のため、2年目の成績が比較できなかったことが残念である。

研究2において明らかになったことは、監督の楽観主義・悲観主義を用いての翌年の成績の予測力は防御率と打率の中間に位置づくということである。しかし、サンプル不足のために、翌年のチームの成績とは統計的に有意な関連が見られなかった。とはいえ、打率よりも高い予測力を持つということから、説明スタイルの予測力の可能性がないと結論づけることもできない。

## 2. Seligman (1991/1994)、 Rettew & Reivich (1995) との比較

Seligman は、監督と選手が楽観主義的なコメントを出すチームの同年の成績が良いばかりか翌年の成績もポジティブに関連するという結論を出した。本論文の研究1の結果によれば、楽観主義の監督のチームの成績が良いという傾向を確認できた。考察では、成績によって、監督の楽観主義・悲観主義が決まるという一方向的関係でなく、お互いに影響を与え合うという双方向の関係が推測できた。ただし、楽観主義の監督のチームが良い成績をあげるとは必ずしも限らないこと、また、楽観主義と悲観主義は、チームの成績すなわち勝率に伴って時系列的に変化する、ということが確認できた。Seligman が行った研究とは異なり、月別で分析した事によって、説明スタイルと成績との関係が時間的変化の検討により強い関連があることを示せたのは本研究の成果である。

翌年の成績の予測を検討した研究2においては、Rettew & Reivich (1995) の研究のよう

な強い関連は統計的には確証されなかった。監督の楽観主義・悲観主義によって翌年の成績予測を行うことは防御率の予測よりも小さいが、打率の予測力よりは大きいという結果となった。説明スタイル（楽観主義・悲観主義）とチーム力の客観的な指標（防御率、打率）との相対的な比較ができたのは本研究の特長である。

### 3. 本研究の意義

本研究の意義は、第1に、楽観主義者の監督のチームが良い成績をおさめるという傾向を実証的に明らかにしたことである。第2に、楽観主義・悲観主義は、不変的なものではなく、チームの成績によって変動することが、月別の成績と楽観主義・悲観主義との関連を見ることによって具体的に明らかにすることができたことである。第3に、監督の説明スタイルが翌年の成績を予測する度合いをチームの客観的指標（防御率、打率）との比較において相対的に明らかにできたことである。

### 4. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、第1に、研究対象を監督のみに限定したために、実際にプレーする選手の研究を行えず、選手の楽観主義・悲観主義と成績との関係を明らかにすることができなかったこと、第2に、1年間分のデータ収集となったため、その信頼性には限界があることである。第3には、2年目の監督が12人中4人も交代したため、翌年度の予測の精度がかなり落ちたことである。

今後の課題として挙げられるのは、第1に、スポーツ選手を対象とした研究を行うことである。監督の楽観主義・悲観主義が実際に試合を行う選手たちにどのような影響を与えるかを明らかにするには、選手の方に注目することが今後の課題である。また、第2に、プロ野球以外のその他のスポーツ競技種目を対象とした研究も興味深い。Seligman (1991/1994) はバスケットと水泳の選手の説明スタイルとの関係を調査している。他種目の選手についても検討することにより、より具体的で普遍的な、スポーツと楽観主義との関係を明らかにできると考えるからである。

#### 《参考・引用文献》

- 二川優太 (2011) プロ野球監督の楽観主義 和光大学卒業論文
- 二川優太 (2012) プロ野球監督の試合後コメント内容と楽観主義 2012年度 VMStudio & TMStudio 学生研究奨励賞論文 NTT データ数理システム
- 二川優太 (2014) プロ野球監督の楽観主義：当年度・翌年度の勝率との関係 和光大学大学院社会文化総合研究科発達・臨床論コース 修士論文
- 二川優太・いとうたけひこ (2013) プロ野球監督の楽観主義と次年度の勝率予測：新聞記事の監督コメントの CAVE 法より 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 277.
- 二川優太・佐竹広太・いとうたけひこ (2012) プロ野球監督の楽観主義と勝率との関係：新聞記事の監督コメントの CAVE 法による評定より 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, 502.
- 井田 政則 (2000) スポーツ競技における成績と説明スタイル 立正大学人文科学研究所年報 37. 1-13.

- 小橋川 久光 (2003) スポーツフロー尺度と運動のポジティブな心理的特性との関係 日本体育学会大会号. 55, 220.
- 日本野球機構 (2011) オフィシャルサイト 全日程 成績カレンダー  
[http://bis.npb.or.jp/2011/calendar/index\\_04.html](http://bis.npb.or.jp/2011/calendar/index_04.html) (2012年11月15日取得)
- Rettew, D. & Reivich, K (1995) Sports and explanatory style. G. M. Buchanan & M. E. P. Seligman (Eds.). *Explanatory style*. New York, NY: Routledge, 176-188.
- Seligman, M. E. P. (1991) *Learned optimism*. New York: Knopf. マーティン・セリグマン (山村宣子訳 1994) オプティミストはなぜ成功するか 講談社
- 島井哲志 (2009) ポジティブ心理学入門 幸せを呼ぶ生き方 星和書店
- Shulman, P., Castellon, C., & Seligman, M. E. P. (1989) Assessing explanatory style: The content analysis of verbatim explanations and the attributional style questionnaire. *Behavioral Research and Therapy*, **27**(5), 505-512.
- スポニチ (2011) プロ野球 2011 成績順位表  
<http://www.sponichi.co.jp/baseball/npb/2011/stats/standing.html> (2011年11月20日取得)
- スポニチ (2012) プロ野球 2012 成績順位表  
<http://www.sponichi.co.jp/baseball/npb/2012/stats/standing.html> (2012年11月10日取得)
- 渡邊愛祈・いとうたけひこ・井上孝代 (2010) 楽観主義内容分析法の説明スタイルに関する測定法: CAVE法(説明スタイルの逐語的内容分析)に着目して マクロ・カウンセリング研究, **9**, 48-59.

付記: 本論文は、二川 (2011、2012、2014) を基に再構成・再解釈したものである。本研究の一部は、二川・佐竹・いとう (2012) および二川・いとう (2013) として学会発表された。図表の整理では、松上伸丈さんにお世話になった。また、木下恵美さんと堀口裕太さんと杉田明宏さんに原稿を点検していただいた。

---

[伊藤 武彦・和光大学現代人間学部心理教育学科教授]  
[ふたがわ ゆうた・和光大学大学院修士課程 2013年修了]